

2016年6月20日 Vol.31

出来高が急増するR&D型マザーズ銘柄

国内要因ではなく海外要因による株価下落が続き、投資家心理は萎縮してしまった感があります。英国でのEU離脱か否かを問う国民投票の結果を待つ中で、株式市場ではいわゆる様子見気分が続き、買い手不在の中で下値を模索する動きが見られます。そうした局面下において出来高が急増してきた銘柄も見られます。その多くはマザーズやJASDAQ市場に上場する中小型銘柄です。全体相場がどうであれ企業活動は続き、新たな成長の芽をもった新興企業に対しての関心が水面下では高まっていることの証なのではないかと思われれます。

アベノミクス第3の矢とも言うべき成長戦略の柱は本来、日本の技術力を高めることにありと筆者は考えています。株式市場では企業業績での評価に加え、成長性を秘めたIT系のビジネスやハイテク製品、創薬系新製品、新サービスなどをテーマにした物色が循環的に起きています。その中から大きく化ける銘柄も登場することがあります。残念ながら株価の評価は短期・中長期に分れ、行き過ぎる場面も往々にしてあります。評価が高まっているうちは良いのですが、何らかの理由や需給の関係で評価が低下する局面もあり、中長期スタンスの投資家も戸惑い気味となります。

2006年6月に東証マザーズに上場した秋田県仙北市に本社を置くインスペック(6656)もそうした成長の芽をもつ研究開発型企業の一つです。半導体検査装置や医療関連機器の開発・製造・販売を手掛ける同社は上場から10年を経て、ようやくビジネスの成長トレンドを確立しつつあり、直近になって一気に評価を高めてきました。事業規模は今期売上高23億円、経常利益1.6億円にしか過ぎませんが、中期計画では2019年4月期に売上45億円、経常利益6.5億円という見通しを示しています。生産性が既存の10倍もある自社開発のFPC(フレキシブル基板)向けロールtoロール型検査装置の引き合いが活発化し、今後の成長を後押しする見通しのほか、病理医不足に対応したWSI(バーチャルスライドシステム)と呼ばれる従来の顕微鏡に変わるデジタル画像システムの急成長が見込まれることが牽引役となるとされます。

同社の発行済み株式数は260万株余りにしか過ぎませんが、過去3か月余りの累計出来高は1100万株を超えており、短期売買と中長期視点での新規投資が重なり取引が活発化しているものと推察されます。時価総額は16億円(2016年6月17日現在)に留まっていますが、市況悪による短期の売りが見られる中で、中長期視点では中期計画の信憑性や主力新製品への評価が株価を下支えしています。強弱感の対立から上にも下にもまだ株価の変動は激しいと予想されますが、皆さんも一度吟味されてみてはいかがでしょうか。

(東京IPOコラムニスト 松尾範久)